22140113

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A: LITERATURE – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A : LITTÉRATURE – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A: LITERATURA – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Friday 9 May 2014 (morning)
Vendredi 9 mai 2014 (matin)
Viernes 9 de mayo de 2014 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is *[20 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[20 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[20 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2014

次の文章と詩のうちどちらか１つを選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

1.

自作の小説を批評家から読み違えられた体験談を書け――僕の率直な言葉に直してしまえば大体そんなことになるのが、編集部の意向であったやうに思ひます。しかしそういふ体験はないんです。いくら考えてみても一度もない。

ですから、なぜそういふ記憶はないと答えるかを記すことが、次のぼくの仕事になってしまひます。

それはもちろん、悪評をあびたことはありますよ。自慢するわけぢゃないけれど、さういふ経験は人並みに持ち合わせている。（いや、人並みよりはずっとすくないかもしれません。何しろぼくの作品数は多くないから。）しかし、悪評は読み違えた結果で、好評は正しく読んでもらえたからだと考えるのは、いくら何でも単純すぎる話でせう。ぼくは、役者子供といったおっとりした感じはわりに好きですが、そういふ趣味のせいで文学原論（？）の判断を改めるわけにはゆきません。

ただし、自分の意図と言ひますか狙ひと言ひますか、それを汲み取ってもらえなかったと感じることはあります。でも、だからと言ってこれが誤読だと言ひ立てるのもをかしな話でせう。意図が充分に表現されていたかどうかといふ、むずかしい問題がはいって来るからです。狙ったらきっと弾丸が当たるのなら、射的屋はつぶれてしまふ。（略）

いよいよ文学原論めいた言ひ方になるわけですが、いったい作品といふものは、作者が書き終えたときに完成するものでせうか。もちろん一応それで完成だが、果して真の完成と言えるものだろうか。ぼくは昔からそのことを疑っています。作品が本当に完成するのは、読者がそれを読み終えたときなのじゃないか、と考えるのです。

たとえばここに「この花は白い」といふ文章があるとします。読者がこれを読んで味はふためには「花」とか「白い」とかいふ概念をすでに持っている必要がある。もしそれがなければコミュニケーションは成立しないわけです。だが文章を書く側について言えば、「花」や「白い」のことは読者に判っているものとして、いはばその部分は暗黙の前提にまかせて書くしかない。つまり「花」や「白い」についての説明は省略するわけですね。

そして小説は文章の連続で出来あがっているから、何のことはない、省略の連続であるといふことになる。その省略を、意識的、無意識的に埋めてゆくのは、読者の仕事です。ここで読者の協力といふことが出て来る。そして作品は、読者の協力を得てはじめて完成するのです。

批評家の機能がどういふものかについては、いろいろなことが言えるでせう。しかしいちばん基本的な部分としては、読者の代表、ないし、優れた読者といふ部分をあげなければならない。そういふ局面を持たない批評家は存在しないわけです。ですから今ぼくが言った、読者の協力といふことを批評について見れば、作品は批評家の協力を得てはじめて完成するといふことになる。これは冷静に事態を判断すれば、何でもない、こく当たり前の話です。ぼくが自分の作品について自信がないわけでは決してありません。白い紙に黒いインキで字が印刷してあるだけでは、それは文学ではないといふ、ただそれだけのことを指摘しているにすぎない。

その点、文学作品についての読者というものは、音楽の場合の演奏家に当ると述べることもできるでせうし、この見立てはぼくの批評論にとって非常に都合がいい。批評家は演奏家でなければならないとぼくは言ひたいのです。

この文章のはじめで、批評家に読み違へられたことはないと書きましたが、それはたしかにその通りだけれど、批評がもし演奏であるとすれば、上手な演奏、下手な演奏といふことはもちろんある。（断っておきますが、褒められたから上手、けなされたから下手といふやうな低級な話をしているのではありません。）

それからまた、いちおう整ってはいるけれども、いかにも生気のない、個性を欠いた、凡庸な演奏といふやうなものもありますね。先生そっくりに奏でせいともいる。さらに、先生の渋い感じや古風なよさを真似ようとして必死に勉強したあげく、かはいそうに先生以上に古めかしくなってしまった若者もいる。（略）

ですから作家は、すくなくともぼくは、自作の批評を読んで、じつに鋭い解釈だし巧みな技巧だと感心したり、ピアニシモがすばらしくきれいだとつぶやいたり、ちえっ、ちっとも指が動いてないちゃないかと舌打ちしたりするわけです。いろいろな演奏家がいる以上、これは当たり前のことでせう。

それから、言ひ添へておきますけど、たしかにあの作品のあそこはよく書けてなかったからあんなふうに奏かれても仕方がないなと思ふこともある。これも当然の事でせう。出来ばえのいい小説ばかり書いていると思ふほど幸福な作家ではぼくはありません。

（丸谷才一「小説を批評された体験」『遊び時間』　一九六八）

（注）

役者子供　―役者は芝居の事しか判らず、まるで子供のような世間しらずであるということ。

2.

青い部屋

わたしは青い部屋のなかです
雨戸に叩き付けるのは雨の音でなく
気の狂(ふ)れたばあさんのわめき
〈むすこをかえせ　むすこをかえせ〉と
わたしの壁にぶつかるから
かたく雨戸をしめて
わたしは青い部屋のなかです

息子は帰って来ないのでしょうか
かくした女(ひと)は　わたしではないのです
何故なら青い部屋はひとりしかはいれないから
ここはどこまでも青く
柩(ひつぎ)もなければ　隠亡(おんぼう)もみあたらないのです

むすこは青い色を好きでした
青い月をみつめているのが好きでした
いつのまにか青い月とむすこは
あいしあってしまったのです
けれども喉がからからな夜
たまらなくてむすこは青い月をかじったのでした
だからむすこの青い月はもうのぼりません

しらせてよこしたのは
タンポポが咲いたこと　そして風が……
だからほんのすこし　雨戸をあけたのです
外には気の狂れたばあさんが立っていたのです
わたしをみつめるために　立っていたのです

25　わたしは青い部屋のなかです
昔　白い指でピアノをたたいたその人は
わたしの雨戸を叩きます
〈むすこをかえせ　むすこをかえせ〉

（吉行理恵『青い部屋』　一九六三）

（注）
隠亡（おんぼう）　戦後まで、火葬場において死者を荼毘（だび）に付して遺骨にする仕事に従事する作業員。現在は「火夫」とよばれている。